

掛袱紗の装飾化と日本の贈答文化

Design of kakefucusa and Gift Culture in Japan

倉盛 三知代、中鳴 祐子

(和歌山大学教育学部)

Michiyo KURAMORI and Yuko NAKAJIMA

2005年10月11日受理

はじめに

掛袱紗とは、ほぼ50cm平方の布裂で、現在では主として結納の際に贈答品の上に掛けて用いられているが、特に江戸時代中期から後期にかけて多用された日本独特の染織品である。江戸期の掛袱紗は非常に装飾化された文様入りのものが贈答行為との関わりで製作されている。そこで、この期の掛袱紗の装飾化の意味・方向を探り、掛袱紗のもつ意義を検討することを目的に本研究を進める。装飾の意味のひとつとしての贈答風俗との関わりに焦点を絞って、資料としては当時の掛袱紗の遺品を集大成した京都書院刊『掛袱紗』図版本^①を中心とし、また当時の『雛形本』、『婚礼諸式書』、その他文学本などを用いる。

1. 掛袱紗の語源とその位置

「ふくさ」という言葉は、江戸時代の随筆集^②に「近江、美濃、尾張などにて、物のやわらかなることを、ふくさといふ」とあり、物の柔らかな様子を表す形容詞として用いられている。同時代『日葡辞書』^③にも「Fucusa fito」とし「比喩・温和でやわらかな人」とある。物だけでなく人柄の柔軟な様子を表す言葉として記されている。同時に、現在と同じ意味をもつ名詞としての使われ方も多くみられ、例えば『貞丈雑記』^④に、「ふくさ小袖、ふくさ料理、ふくさ吸物、ふくさ帯、ふくさみそ」とふくさを使った熟語が見られる。「ふくさ小袖」とは「縮緬でつくった着物」、また「ふくさ料理」とは「江戸時代の正式な本膳料理に対し、その形を少々簡略化したもの」で「柔らかな料理にも用いた」とある。このように形容詞と名詞のどちらも「ふっくらと柔らかい」という意味をもち、「正式なものに対して略式、硬いものに対して柔らかなふっくらしたもの」という意味をもっていたといえる。「掛袱紗」との関連で考えると、掛袱紗には縮緬や羽二重、綾子といった特に柔らかな布地が多用されており、この材質感がふくさの語源(意味)と共通していると思われる。

「袱紗」の方から語源をみてみよう。「袱紗」の文字以外に「帛紗、服紗、幅紗、手帕、覆紗、袋絹、帛、帛子、袱子、包袱、富久紗」などが散見される。「この多くの文字はそれぞれの使途で使い分けられており、例えば、「帛紗」が茶の湯の点前で使われる」と『大百

科事典』にあるが、一般的に「袱紗」が用いられていると思われる。そこで「袱紗」の語源についてみていくこととする。「袱紗」は「袱子」の音転とされる。「子」は「扇子」と同じ使われ方で意味がなく、「袱」というのは「包み裂」であるとされている。つまり「袱紗」というのは「包み裂」の一種であるといえる。

そこで、「包み」という部分に注目し、「つつむ」という行為が日本人の生活の中でどのような意味をもち、また形成されたのかということを見ていこう。

「包む」という言葉は「かこむ」「くるむ」「はらむ」「みごもる」「いれる」「ふくむ」「たばねる」「さえぎる」「まとう」「あわせもつ」「人に知らせない」などと辞書にあるが、機能面からとらえると、「保護する」「収容する」「緩衝する」「抱擁する」「かくす」「おおう」「保管する」ということになる。そこからは「包み」という行為が人間生活の中で果たした役割が、単に作業面だけでないことに気づかされる。

「包み」を「文化」として考え、「包み文化」という形で論述した文献として額田巖の『包み』^⑤がある。

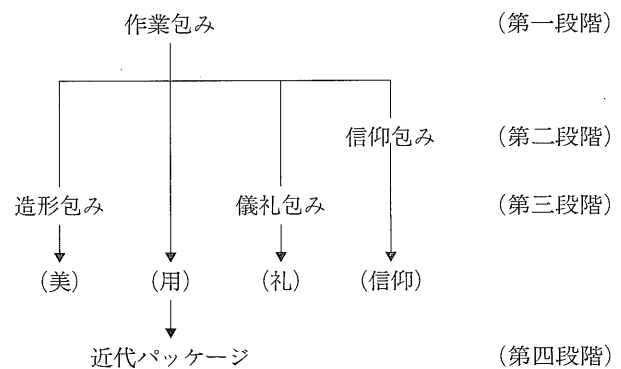


図1 包み文化の系譜(『包み』より)

それによると、第一段階では、古代の生活で「作業包み」が生活に必要なものとして考案され、そして第二、第三段階の「信仰包み」「儀礼包み」「造形包み」を経て、現代に至っている(図1)。第二段階の「信仰包み」は祈占や呪術の道具として「包み」が使われた時代であり、第三段階の「儀礼包み」は、公家有職や武家故実として、「造形包み」は公家・武家社会の茶道

や香道の隆盛に伴って発達し、第四段階の「近代パッケージ」というのは、近代に至って開花した「作業包み」であると、包み形成のプロセスが捉えられている。額田の論述にみるように、「包み」は単に作業用としての「用」の要素以外にも「美」「礼」「信仰」といった要素と交ざり合って「包み文化」が成立していることがわかる。

ついで、「掛」の語については、「ある所に支えとめる」「他に(全体に)覆いかぶせる」「一方から他方にさし渡す」の意味が辞書にはみられる。「他に覆いかぶせる」は前述の「包む」の意味と通じ、「包み裂」であると確認できよう。そして、「支えとめる」「他方へさし渡す」は「掛袱紗」に独自の意味合いを加えるといえよう。つまり、「支えとめる」は「人に見せるようにとめ掲げる」の意味の連なりがあり、「他方へさし渡す」は「それをたより、目当てにして、もの、心を寄せる」との意味の連なりがある。これにより、「掛」の語義としての「見せる」と「心を寄せる」²⁶⁾の意味は、本研究「掛袱紗」にみられる「装飾化」及び「贈答行為」とのつながりへと意味合いを広げるように思われる。

以上、「袱紗」の語源から、「袱紗」は単に「埃」「塵よけ」という作業を重視した用の要素以外に、美、礼、信仰の要素をもっていることが注目された。また、「掛袱紗」については、特に、「掛ける」の語義に、装飾化や贈答とのつながりがみられ、美や礼の要素の強調が加わったと捉えられる。

次に、生活面での用いられ方の起源について『包み』を参考に概観しておく。「袱紗」はおそらく中国の風習から発達したと考えられる。唐代において、賀車の軾(車前に設けられた横木)の上に覆いとして、かつ装飾品として使われていた「袱」というものが、平安時代頃に日本に伝来し、牛車を使用する貴族が訪問先への贈答品の上に塵よけの目的で、車の軾に覆い裂として使われた。これにより中国の「袱」と日本の「袱紗」とのつながりが考えられている。鎌倉、室町時代になると、「袱紗」は身分の上下関係を重んじる武家社会の中で一層「贈答」とのつながりが深まった使われ方になったといえる。そこでは「贈答」というものが、単に物のやりとりを意味するのではなく、精神面でのつながり、お互いの意思の確認の役割を果たしていたと思われる。この期に生まれた「小笠原礼法」の中にも「贈答」に関する項目が見られ、「紙包み」として贈答品に合った多くの包み方が示され、「包み」が非常に発達する。また、茶道の中で「茶帛紗」が多用されていることも注目される。しかし、この期の「包み」は必ず贈答品の一部を包まずに見せ、品物に刃物など危険なものは隠していないことを示す包み方がみられる点、武家社会特有の「包み」文化であり、すべてを覆う「掛袱紗」との異なる面もみられる。再び掛袱紗として表面化して使われだしたのは江戸時代といえる。

町人文化が結実していった時代性をうけて、「贈答」も広く普及し、かつ上流社会から伝わった形式化、儀礼化された「贈答」が重視されていく。さらに江戸時代に盛んに行われるようになった年中行事や人生の通過儀礼行事と結びついて「贈答」が頻繁になされるようになる。公家や武家だけでなく、町人や一般庶民の生活の中で、「贈答」との結びつきで「掛袱紗」が使われたようで、江戸時代は「掛袱紗」の全盛期と位置づけられよう。しかし続く明治時代は我が国の近代化のあゆみの中で、「掛袱紗」は外国への輸出品として、職人の粋を尽くした観賞用の染織作品として位置づけられ、「贈答」との結びつきが薄れていく。

現在は本当に形式ばった儀式的席のみで、しかも家紋や定紋入りの質素なものが用いられ、生活の中であまり使われなくなってきたといえよう。

2. 掛袱紗と贈答風俗

袱紗の用途を考えると、「贈答」ということと離せない。贈答風俗の歴史をたどると、その基は近隣同士での供物や食物のやりとり、共食であった。それが、公家、武家、町人その他の庶民という階級が生まれるに従い、単なる品物のやりとりというだけでなく、精神的紐帯を強化し、確認し合う役割をもつようになり、儀式化していく。士農工商の階級が確立した江戸時代には、生活そのものの儀式化、またその中の贈答が行われたようである。「公家も武家も、実はその社会生活にはいつも理由をつけて、進物贈答という形式が重んぜられていた。」²⁷⁾、「武家の大名の進物、贈りものといえば、鬼ヶ島の宝物みたいに珍物が多かった。」²⁸⁾という風に、当時の贈答の様子が窺える。庶民についても同様に、桃の節句の贈答に関して、「上歴々方はいざ知らず、中以下は親類縁者、諸芸の師の許を始め、士商は御得意方へ参らす品は、白酒、蛤、胡葱等の野菜、重箱詰の料理、且つは消息の贈答あり。」²⁹⁾という風に、すべての階級で贈答が行われている。そして「儀式化」という点からみると、「武家では、小笠原流が漸次礼式を支配し、民家も亦、これに倣うに至った。」「江戸時代程民間に於て、各種の儀式方式が規則正しく行われた時代はない。時には武家方よりも民間に於て複雑な祝儀が営まれてゐる。」と江馬³⁰⁾の論述にあることから、公家や武家で、そしてそれを上回るほど、庶民の中で、儀式化された贈答が行われていたことがわかる。

この項では、江戸時代の贈答風俗、特に儀式化された贈答が多くみられる、当時の年中行事や人生の通過儀礼を取りあげ、概観することを試みる。掛袱紗の用途が慶事であると考えられることから、弔事については省き、年中行事の中では「正月」「桃の節句」「端午の節句」「八朔」「盆」、そして人生の通過儀礼の中では「出産」「初節句」「結婚」「長寿」を取りあげ、各行事

の意味や性格とそこに見られる贈答風俗についての関連を捉える。つまり、資料とする掛袱紗(遺品図版)を、行事の特徴を反映したものとして整理分類できるのではないか、その視点から掛袱紗の装飾化の意味も捉えられるのではないかと考え、贈答風俗と掛袱紗のつながりへと研究を進めることとする。

そこで、各行事の意味や性格、そこに見られる贈答について整理を行ったのが表1である。

3. 掛袱紗の装飾化(江戸後期の遺品図版)

この項では、江戸時代後期に見られる文様入り掛袱紗における装飾化の意味を探るため、当時の優れた掛袱紗を集大成した京都書院刊『繡袱紗』^{註1)}を主な資料(50枚の遺品図版所収)とし、それらの装飾の傾向をみていくことにする。ただしこれらの遺品図版は当時の所有者名が明記されておらず、どの階級でどう使われたかは明確ではない。しかし、江戸中期の掛袱紗遺品^{註10)}がいわゆる武家風の特徴をもつのに比して、型にはまらない自由な庶民性といった印象が全体として窺えるようである^{註1)}。おそらく上級の豪家の町人、商人

に用いられたと思われ、それらを江戸後期の庶民文化の表れとして捉えていくことにする。

資料とする掛袱紗の装飾化について、次の4つの観点から整理を試みる。1) 掛袱紗の用途である贈答が文様の中にどう反映しているかをみる一つの具体として、行事を示す文様が施されている掛袱紗は行事の際に使われたものとして整理する。(一般的な吉祥文様は対象外とする。)2) 資料全体の文様傾向をみるために、文様と文様の素材の組み合わせをみる。3) 資料全体の傾向をみるため、色彩と構図をみる。4) 資料全体の装飾技法をみる。ただし、紙数の関係からここでは1)と2)について述べる。

1) 贈答(行事)との関わりから

第2項でみた江戸時代に儀式化して行われた行事内容を参考にし、それらの行事内容を表す文様が施されているのではないかと考えるのもとに、各行事の特徴を表現していると思われる掛袱紗を資料の中から選び出した。遺品図版50点のうち、18点がほぼ特定の行事の特徴が表現されていると推定された。表2に示す(1)~(8)の行事と掛袱紗についてみていくこととする。

表1 行事と贈答風俗

	行事の起源・特徴・意義	贈答風俗
(1) 正月	・農作物の豊作を祈願する農耕儀礼 →新しい年の始めを祝う行事	・農作物の供物を贈る ・新春の挨拶回りに「年玉」を贈る 農家では餅 町家・商家では扇・手拭いなど
(2) 桃の節句	・上巳(三月三日)の忌日に、水辺で禊ぎ、人形(ひとがた)に自分の穢を移し水に流す厄払いの行事(→流し雛) →女兒が美しく、幸せになるよう祝う初節句	・装飾的に形を整えた雛人形を飾る 雛祭りの行事となり、女兒の初節句に雛人形を贈る ・桃の花、白酒で祝う
(3) 端午の節句	・端午(五月五日)の忌日に、邪気を祓う行事 →男児の誕生、成長を祝う初節句	・菖蒲は邪気を祓うものとされ、菖蒲湯をたて、菖蒲刀を贈る ・鯉登り、武者人形を飾る ・粽、柏餅をふるまう
(4) 八朔	・八月朔日、新穀の豊熟を祈る行事 →恩恵を受けている人(頼む人)に、収穫したものを贈る(主従関係の象徴)	・収穫したものを恩恵を受けている人に贈る
(5) 盆	・畑作物の収穫を感謝し祝う行事 →盂蘭盆会と混淆し、盆の贈答儀礼 →先祖供養の儀礼	・麦など収穫したものを贈る(中元) ・祖先の霊への供物を共食し、故人の霊を供養したり、生存している父母、年長者、恩人等に贈る
(6) 出産	・子どもの出産に関する祝い行事 →帯祝い	・妊娠5ヶ月目に妊婦の腹に巻く腹帯を贈る ・産着を贈る
(7) 結婚	・男女が夫妻となる手続き行事 →結納の行事	・養育してくれた両親への感謝のしるしとして小袖、帯、これらを金品に替えた小袖料、帯料に酒肴を添えて贈る
(8) 長寿	・長寿の祝い行事 →還暦(60歳)、古希(70歳)、喜寿(77歳)、米寿(88歳)、白寿(99歳)などの一定の年齢に達した人の長寿を祝う「賀」の祝い。	・公家、武家は、和歌の色紙、屏風、香炉、花生などの道具類など、民間は小袖、袴、樽肴など階級により贈答のちがいがみられる

参考文献：江馬務「一生の典札」^{註18)} 日本風俗史学会編『日本風俗史事典』^{註32)}

(1)正月の贈答の際に、多く用いられたと思われる掛袱紗は表2にあげた5点で、すべて「宝船」を主なモチーフとして描いているものであった。「宝船」モチーフは、正月の縁起物の一つである。江戸期民間の生活における記述に「二日の夜はまた初夢といって、宝舟の絵を枕の下に敷いて寝る慣行もあった。」^{#11)}とあるように、宝物と七福神を乗せた「宝船」の絵は吉夢をみるとされた。また、「宝船」の意味には「人生順風への祈り」^{#12)}として新年に向けての人々の願いが込められていたと思われる。図2-1のモチーフは船の土台が縁起ものの海老の姿で表現され、吉祥の意味が強められている。5枚の「宝船」モチーフに共通していることは、「宝船」が遠ざかっていく船ではなく、こちらへ近づいてくるように描かれていることである。障害なく突き進んでくる船に「人生順風」への願いが込められていたと思われる。

表2 贈答(行事)との関連

(計 18点)

行事	行事の特徴	図版番号	文 様	地色	技法
(1) 正月	人生順風 吉 夢	25	宝 船	縹	刺繍
		29	宝 船	濃藍	刺繍
		40	宝 船	藍	刺繍
		44	宝 船	紺	刺繍
		48	飛鶴宝船	藍	刺繍
(2) 節 句	子供の成長	26	布袋唐子	縹	刺繍
		35	唐子雪遊び	紺	刺繍
		41	雪中唐子	藍	刺繍
(3) 桃の節句	女兒の成長	39	桃唐扇	赤	刺繍
(4) 端午の節句	男児の成長	20	賀茂競馬風景	縹	刺繍
(5) 八朔・盆	五穀豊饒 頼む人への感謝	10	田園風景	薄藍	刺繍
(6) 出 産	赤児の誕生	45	鶏太鼓	紺	刺繍
		46	松 鶴	藍	刺繍
(7) 結 婚	夫婦和合 婚礼道具	32	貝 合 せ	赤	刺繍
		50	貝 合 せ	縹	友禅
		14	貝 桶	紺	刺繍
		31	貝 桶	薄藍	刺繍
(8) 長 寿	長 寿	18	雪中筍掘	浅黄	刺繍

(2)節句については、「桃の節句」と「端午の節句」があげられるが、共に祝う対象が子どもである。両節句の行事に用いられたと思われる掛袱紗として表2の唐子をモチーフとした3点を取りあげる。図2-2の唐子は七福神の一人である「布袋」の傍で遊び戯れている。「布袋」は「子どもを愛し、これと戯れて悠々自適とした生活をおくり…」といわれるように、子どもに縁のある人物である。また、異国趣味に、中国風の衣装や髪形をした唐子は、三人唐子、五人唐子、七人唐子

と呼ばれ、七、五、三の奇数で描かれるのが一般的であった。子どもは「遊びをせむと生まれけむ、戯れせんとや生まれけむ…」^{#12)}と古代にも詠まれたごとくに遊ぶ存在として、子どもの戯れている姿に子どもの成長を祝う心が表現されていると思われる。

(3)桃の節句の際に、多く用いられたと思われる掛袱紗として図2-3の「赤地桃扇文」がある。桃には中国に起源をもち、桃の枝で邪気を避けた逸話^{#13)}や上巳(三月三日)に桃酒を飲む風習がある。また「唐扇」は縁起物として、「唐子」の持ち物として一緒に描かれていることが多い。桃と唐扇のモチーフに桃の色あいも加わって女兒のお祝いの表現が感じられる。

(4)端午の節句の際に多く用いられたと思われるのは、図2-4の「縹地賀茂競馬風景文」である。端午の節句は旧暦、新暦を問わず五月五日に行われている。この日の行事に、京都上賀茂、賀茂別雷神社の行事^{#14)}としてこの賀茂競馬が行われた。図は文字通り賀茂競馬の風景と思われ、勇ましさや力強さが表現され、男児の祝い行事に相応しい文様だと思われる。

(5)八朔と盆の行事については、本来農耕儀礼のひとつとして収穫祝いの意味をもっていた。(八朔は現在では盆にみられる中元に変形合流したと考えられる。)この両行事の際に多く用いられたと思われる掛袱紗としては、図2-5の「薄藍地田園風景文」が適当であると思われる。この文様は一枚の掛袱紗の中に種まきから、田植え、田の草取り、刈り入れ、精米、倉入などが描かれており、一年間の農作業を表している。「士農工商の中に田作は寿の最初なり云々」^{#15)}とあり、農耕は元来吉祥の意味をもつものである。春夏秋冬と四季の流れに沿った農耕の絵には描かれている人や動物も表情豊かで、農耕への楽しさ・感謝と吉祥の意味が感じられるものである。

(6)出産に関する贈答の際に、多く用いられたと思われるのは、図2-6「鶏太鼓文」、図2-7「松鶴文」の2点である。前者は諫鼓の故事を連想させ、親鶏がひよこの遊ぶのを見守っている^{#16)}。後者は吉祥の松に夫婦の鶴と松の巢の雛鶴が描かれ、ともに夫婦の幸福と子どもへの愛情を表現しており、子どもの出産を祝う贈答に相応しいといえよう。

(7)結婚の贈答の際に、多く用いられたと思われる掛袱紗として、表2にあげた4点が考えられ、主なモチーフに貝合わせ、貝桶が描かれている。「貝合わせ」(図2-8)は平安時代に見られる「物合わせ」の一種であるが、蛤貝は上下合わせて合うものが必ず一組しかないことから、夫婦の契りを示す意味をもつ^{#17)}ものとして使われる。また、「貝桶」は「見合せ」の入れ物として使われ、「見合せ」の道具を左片、右片に分けて2個一組にして「貝桶」が使われた^{#18)}。民間にみられる(上流の町人を対象としているが)結婚式・婚礼調度に関する記述^{#18)}に、貝あわせの貝、貝桶が明記され、婚儀の中

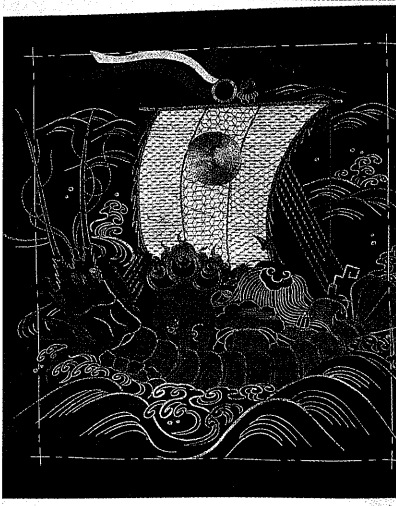


図2-1 宝船文(正月)

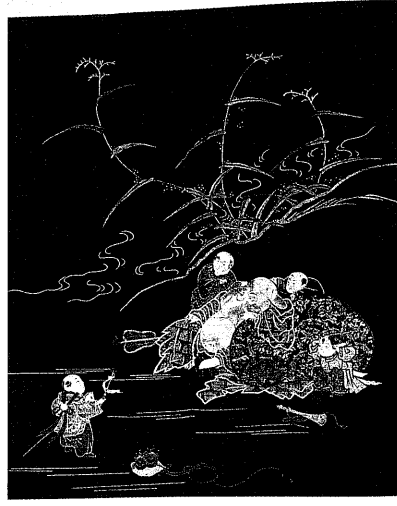


図2-2 布袋と戯れる唐子文(節句)



図2-3 桃と唐扇文(桃の節句)



図2-4 加茂競馬文(端午の節句)



図2-5 農耕文(八朔・盆)



図2-6 鶏と太鼓文(出産)

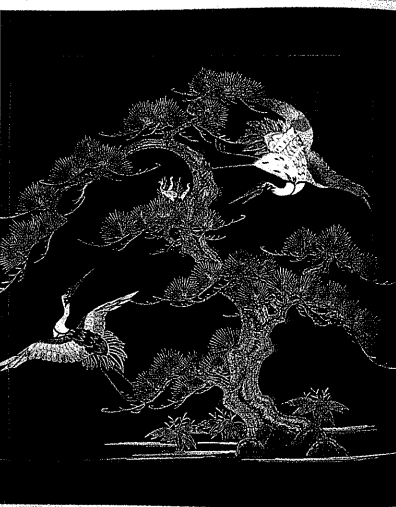


図2-7 松鶴文(出産)

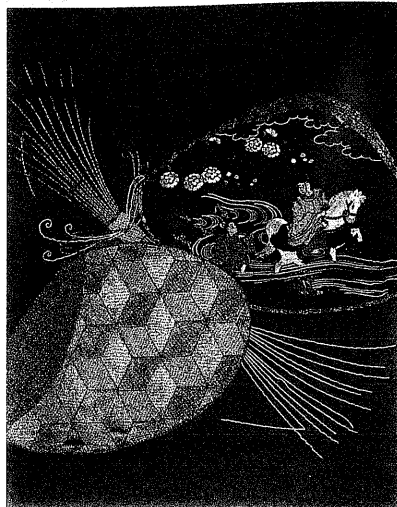


図2-8 貝合せ文(結婚)



図2-9 雪中筍掘文(長寿)

で「貝桶の儀」というものが取りあげられている。結婚を祝う贈答に相応しいモチーフといえよう。

(8)長寿祝いの贈答の際に、多く用いられた掛袱紗としては、図2-9の「浅葱地雪中筍掘文」が考えられる。このモチーフは中国の説話¹⁹⁾、「楚国先賢伝に白く、宗が母筍を嗜み、冬節に將に至らんとす。時に筍尚未だ生ぜず。宗竹林に入りて哀嘆す。而して筍之が為に出でて、以て母に供するを得たり。皆以て至孝の感を致す所と為す。…」を絵にしたものと思われる。雪の中にて筍を掘る男の表情から喜びが伝わってくるようである。長寿を祝う際の贈答に適切なモチーフといえよう。(この掛袱紗以外に、長寿の意味をもつと考えられている鶴、亀、松竹梅、蓬萊山の饗龜などをモチーフとしたものもみられたが、それらはお祝い行事全般に用いられるモチーフでもあるので、ここでは長寿のお祝いに限定されると思われるもののみを取りあげた。)

以上、贈答風俗に代表される行事との関連の視点から、各行事の特徴を表現していると考えられる掛袱紗を取りあげた。資料とした遺品図版50点のうち18点でほぼ特定の行事の特徴が表現されていた。ただし、複数あるいは、どの行事にも用いられたであろうと考えられるものは加えていないので、それらを加えると、掛袱紗の大半が各行事との関連で製作され、用いられているといえよう。

掛袱紗は、それぞれの贈答風俗の行事を表現するこ

とによって、一層、贈答に込められた吉祥の心や祝う心を、相手に伝える役割を果たしていたと思われる。つまり、贈答の大切な役割である「コミュニケーション」を強調するひとつの手段として、掛袱紗は当時の人々に用いられていたと考えられる。

2) 吉祥文様として

ここでは、第二の観点として、当時の掛袱紗の文様にみられる傾向を探るため、50枚すべての遺品図版文様を吉祥文と考へ、みていくこととする。

これらの文様は慶事の贈答に用いられた「掛袱紗」の文様として、特に「伝達手段」としての意味をもっており、特別な場合を除いて、「よいしるし、めでたいしるし」を表す吉祥文が用いられていると考える。それらのモチーフを整理分類して、その傾向について考察する。資料に描かれているモチーフ(素材)をまとめたのが表3、表4、表5である。表3により、一番多くみられたのは「器物文様」の23点で、資料とした遺品図版の約半数に及んでいる。結婚行事に関係があると思われる「貝合せ」や「貝桶」、また正月の行事に関係があると思われる「宝船」、そしてどの行事にも通用する吉祥文である「熨斗」や「扇」などがみられた。次いで、「植物文様」の15点である。日本人好みの吉祥を意味する植物がみられ、特に「松、竹、梅」が3つとも組み合わせられて描かれているものが5点ある。次には「動物文様」「天象・山水文様」が11点、「人物文

表3 個々の素材による分類

分類名	モチーフ名	枚数
器物文様	貝合せ、貝桶、熨斗、扇面、百人一首、掛軸、宝船、宝づくし、御所車、几帳、桜閣、太鼓、唐扇、酒瓶	23
植物文様	松竹梅、松、桜、藤、橘、楓、水仙、筍、桃	15
動物文様	鶴(並鶴、丹鶴、飛鶴)、鶴亀、群亀、群鳥、群蝶、錦鶏、極楽鳥	11
天象・山水(風景)	雪、渦巻、社頭献物、近江八景、業平東下り、田園風景、洛中風景、賀茂競馬風景	11
人物文様	唐子(唐子雪遊び、雪中唐子、布袋唐子)、猩々(七人猩々、猩々酒瓶)、業平東下り、三番叟、高砂、雪中筍掘(宗)、舞楽胡蝶	10
空想上の動植物	布袋、猩々、鳳凰、牡丹唐草、匹田唐草	5

表4 文芸・芸能関係をテーマにした文様

観楓几帳	(『源氏物語』)	業平東下り	(『伊勢物語』)	12
近江八景	(紫式部ゆかりの石山秋月)	雪中筍掘	(『三国志』)	
舞楽胡蝶	(舞 楽)	唐子雪遊び	(狂言能)	
		布袋唐子		
		雪中唐子		
高 砂	(祝言能)	猩々酒瓶	(祝言能)	
三 番 叟	(祝言能)	七人猩々		

(計 22点)

表 5 組み合わせによる分類

分類名	文	様	分類名	文	様	
器物文様 + 植物文様 (計6点)	熨斗 熨斗 扇面 几帳 御所車 唐扇	+ + + + + +	動物文様 + 植物文様 (計6点)	鶴亀 並亀 鶴 鶴 極楽鳥 錦鶏	+ + + + + +	松竹梅 松竹梅 松竹梅 松 藤 桜 華 散
植物文様 + 植物文様 (計6点)	松 藤	+ +	天象・山水 + 人物文様 (計4点)	雪 雪 富士	+ + +	唐子 人物 (宗) 業平
						竹 梅 桜

様」が10点である。「動物文様」では吉祥の小禽類が主である。「天象・山水文様」「人物文様」は文学・芸能とのつながりがうかがえる。そこで少し視点をかえて、文学・芸能関係をテーマにした文様をあげると表4の通り、12点ある。いずれも「高砂」「三番叟」などの祝言能をはじめとし、胡蝶の舞、王朝文学などの「めでたい、喜びの心」をテーマとした文芸がモチーフとなっている。次に、主モチーフの組み合わせの点から整理したのが表5である。(主モチーフが単一の場合は表に含まれていない)「器物文様」と「植物文様」、「動物文様」と「植物文様」、「植物文様」と「植物文様」、「天象・山水文様」と「人物文様」の組み合わせがみられた。

以上、資料とした掛袱紗の文様の特徴としては、まず器物文様が多くみられた。これは贈答の際に実際に使われている調度品が吉祥文様となっていることが多いと思われる。つまり、これらの器物文様を描くことで、ある特定の行事を表したり、その中に含まれる吉祥の心を表すことができるということに連なるのである。また、モチーフの組み合わせの分類でみたように、単独のモチーフで描かれているものは少なく、複数のモチーフを描いているものが多い。そこからは、吉祥文様を幾重にも描き重ねることにより、贈る相手にその心を伝え、心を同じくしたいという掛袱紗のもつ意味が、一層増幅されていると思われる。また、文学・芸能関係をテーマとしたモチーフが多くみられたことも特徴である。説話や文学作品の一場面だけの文様であるが、その物語性のひろがりとともに、そこから感じとれる吉祥の心が重ねられて贈る相手に伝えることができるという点、深く心に響いていくものがあると思われる。全体として、特有の意味をもつモチーフが絵画風に描かれているものが多くみられた。これは、掛袱紗というものが、その布裂を折り曲げたりせず、そのままの形で広げて使用することから、平たい画面が用意され、装飾化に富むものが考えられたのであろう。

4. 掛袱紗の性格

ここでは、前項で資料とした江戸後期掛袱紗遺品と江戸中期の掛袱紗遺品(興福院の掛袱紗)^{#20}との比較を試み、次いで、当時の雑誌等から掛袱紗の性格・あり方を捉えたいと考える。

1) 興福院の掛袱紗

興福院の掛袱紗は、五代将軍綱吉が側室瑞春院に、年始年末の祝儀の際に贈ったもので、1713年(正徳3年)時の興福院の住職へ瑞春院から寄進されたものである^{#20}。現存する掛袱紗の中で最も古く、江戸中期に武家の上流階級で使われていた、由緒明らかなもので、全部で31枚ある。朝日出版『重要文化財引・補遺II』^{#10}の中に、また『興福院の掛袱紗』^{#20}として、すべて掲載、出版されている。それらを贈答風俗とのかかわりからみた場合、主として年始年末に用いられたものと伝えられている。その観点からみると、前項の江戸後期の掛袱紗の正月行事でみられた「宝船」のモチーフがここでもみられた。「宝船」に加えて「千歳」の文字が加わっている。「千歳」には長寿の意味と祝儀的歌舞である能楽「翁」に登場する露払い役としての意味もあり、正月を祝い、長寿を願う気持ちが表現されていると思われる。このほかに、「千歳」「万歳」「万歳楽」「千秋楽」など、正月の初めに各家を回り、賀詞を述べて舞い、祝儀をもらって歩く正月の門付芸の一種をさす文字や、福、寿、長生など祝意や長寿を表現する文字文様が多くみられ、年始の贈答用の掛袱紗として納得されるデザインである。次に、全体のモチーフについて、前項でみた後期掛袱紗(Aとする)との比較を行ったのが表6である。興福院の掛袱紗は、表にみるように器物文様と植物文様がすべてに描かれていた。その上で、更に文字文様が描かれているものが多くみられた(84%)。またA(後期掛袱紗)の庶民的印象に比して、高雅な印象を受けるモチーフが多い。茶華道の道具や反物、文字文様などに、当時の上流階級の好尚が窺え、更に当時の職人が蘊蓄を傾けたと思われ、高度の技術で製作されている。概して、モチーフの組み合わせに、器物文様と植物文様と文字文様と3つの組

表6 興福院の掛袱紗に見られる文様 (『重要文化財 31・補遺II』)

※10)

	Aにも共通するモチーフ	Aに見られないモチーフ	枚数
器物文様	宝船、宝尽し、扇(末広)、花熨斗、歌留多箱	反物、米俵、扇(中啓)、三宝、島台、行器、銚子、盃、花籠、羽子板、茶釜	31
植物文様	松、竹、梅、桜、橘、牡丹	菊、笹、柳、千両、ゆづり葉、裏白、菖蒲、撫子、百合、葎、よもぎ、朝顔	31
文字文様		寿、宝寿、福寿、樂寿、万歳樂、福貴、千歳、万歳、万寿、千秋樂、繁昌、長生	26

A…研究資料の掛袱紗(後期遺品)

み合わせが多く、吉祥の心が重ねられ強調されていることが印象づけられた。

以上、前項で資料として用いた江戸後期の掛袱紗と同じく、中期の興福院の掛袱紗も贈答用、特に年末年始の贈答の際に用いられたことが文様表現から伝わってくる。なかでも、反物を島台や三宝と一緒に描いている文様は、贈答風俗そのものを表現しているモチーフとして興味深い。

2) 雑誌等にみられる掛袱紗

当時のファッションブックといえる『雛形本』および文学本をもとに、当時の庶民における掛袱紗の普及の様子をみていくこととする。

『雛形本』は主に小袖の図案を表し、加工仕様、地合・色調を書き加えた図案帳というべきものであるが、その中にごく僅かであるが服飾品も掲載されている。今尾家所蔵の『雛形本』全30巻^{※21)}の中に、『友禅ひいなかた』^{※22)}に3点、『雛形愛染川』^{※23)}に3点、今尾家所蔵以外の雛形本に『雛形木の葉硯』^{※24)}に1点の合計7点の掛袱紗の記載があった。それらのモチーフをみると、松や竹、桃、稲穂、蓬萊山などの植物文様や山水、鶴亀、海老などの小禽類、器物文様の熨斗文そして物

語性のある文様(吉野川)などいずれも吉祥文様が描かれている。やはり当時の庶民が掛袱紗に吉祥の意味をもたせたことが窺える(図3-1~図3-3)。また、図の説明文に次の2点が注目された。1点は「うぶぎふくさ」^{※23)}とあり、これは「産着袱紗」と思われる。赤子を産湯から取りあげるとき用いる白羽二重、または白絹の袱紗のことで、掛袱紗に比してやや大きく用途も異なってくるが、「出産」に関係する慶び事であり、「包む」という行為が同じ袱紗類だといえる。もう1点は「ふくさもよし」^{※23)}と書かれており、これは小袖の文様にも袱紗の文様にも使うことができるという意味と思われる。(この図の載っている『雛形愛染川』は小袖文様の大半が、このような方形の中に描かれている。) 袱紗と小袖の文様についての考察は、既に角山が『掛袱紗考』^{※25)}の中で論述している。共通の文様である小袖と掛袱紗を一緒に身につけてもつことにより、服装との調和をはかったものと考えられている。『雛形本』にみられた掛袱紗は少数であり、小袖ほどには庶民一般に普及してはいなかったかもしれないが、ファッションブックにモチーフデザインや色彩・加工法が取りあげられるほどには普及していたものと思われる。ま



図3-1 熨斗文(『雛形愛染川』)



図3-2 「うぶぎふくさ」と傍注(『雛形愛染川』)

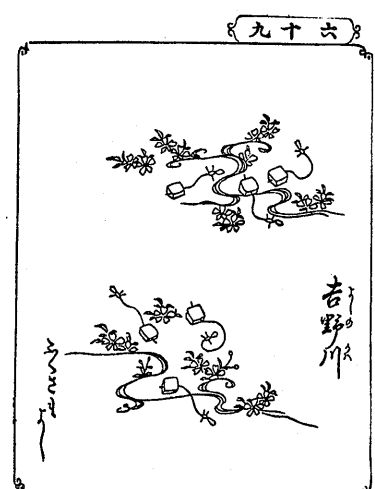


図3-3 物語性を表現「ふくさもよし」と傍注(『雛形愛染川』)

た、その文様からは吉祥の意味が窺え、吉祥の事柄の際に、庶民に用いられたものであったと考えられる。

次に、掛袱紗の「掛け方」についての記述を文学本でみよう。井原西鶴『好色一代男』巻7²⁶⁾に「…御目に懸かると服紗をあけて…」という表現があり、これについて二とおりの注釈がある。一つは「捻じ服紗」として、服紗を捻って、その中に金子を入れておくもの、もう一つは「掛袱紗」として山のように積んだ金子に掛けておくもの、という解釈である。いずれにしても、この『好色一代男』は近世初期の上層町人の豪華な遊興を描いた風俗小説であることから、当時の上層町人の間では、既にこの袱紗が用いられていたものと思われる。

3) 婚礼調度にみられる掛袱紗

ここでは、掛袱紗が贈答風俗との関わりからどう用いられていたかを検討する。

当時の文献『女用訓蒙図彙』(元禄元年刊)²⁷⁾に、贈答と関連のある行事の一つである「結婚」の際に、花嫁が持っていく婚礼調度として、183個に及ぶ多くの品が記されている。その中の一つに掛袱紗と思われる図示がある(図3-4)。図示されている一枚は「捻り袱紗」と考えられ、残りの二枚がおそらく掛袱紗と思われる。それらは「花車」の一つとして書かれている。「花車」とは、正確には「花車道具」と呼ばれ、「日常生活に必要な華美でぜいたくな道具」²⁸⁾とあり、同項目内に扇や笠、香包、匂袋などがみられることから、掛袱紗も少し特別な場合に用いるもの、この場合であれば、贈答の際に用いるものとして、やゝぜいたくなものであったと思われる。同じく、婚礼調度としての掛袱紗

に関する資料として、嘉永五年(1852年)、京都で使用人およそ30人を雇う豪商の町人の娘の婚礼調度の記録が残っている²⁹⁾。そこには、「帛紗箱」という箱に入れておくものとして、帛紗6枚、風呂敷4枚とあり、これら帛紗には「牡丹蝶」「扇もやふ」「御所車」「紋付」といった文様の説明が付記されている。数の上から、特定の贈答に使われていたと思われる。他方、結婚の儀礼に関して、江馬の「江戸時代の結婚の歴史」³⁰⁾の論述があり、婚礼調度のひとつとして袱紗類が複数枚記載されている。

このような掛袱紗の使われ方については、今井の論述³¹⁾にもふれられており、それによると時代が下がるが、明治期の関西の其大家の婚礼に関する荷物明細書が載せられている。それには合計25枚の多種多様な掛袱紗がみられ、文様の中には、「五節句文様」として五枚記されていることから、それぞれの節句にあった文様が施され、その行事の際に用いられたと思われる。(明治期は七・七禁令など儉約政策が進められる中で、掛袱紗は輸出用の観賞用となり、生活の中では用いられなくなっていく時代である。)この例は、江戸後期の掛袱紗の用いられ方に準じているのではないかとと思われる。江戸時代後期に、上層の町人には各行事にあったそれぞれの掛袱紗が、婚礼調度として用いられたといえよう。

5. まとめ

江戸後期という庶民を中心とする文化が華やいだ時代に全盛期を迎えたとき、掛袱紗の装飾化の意味を明らかにしたいと考え本研究を進めてきた。掛袱紗の装飾化の意味は、用途とされる贈答行為そのものに求められるのではないかと考えた。贈答というのは、現在でも年中行事や人生の通過儀礼の際に多くみられ、江戸時代にも同様にみられたものである。つまり、贈答はこのような行事の際に行われることが多く、時代とともにこれらの行事に合う形で形式化、儀式化されたといえよう。日本人の贈答を特徴づけるものの第1点が、この形式化・儀式化であると思われ、江戸後期にみられる贈答において、特に顕著といえる。つまり、この時代は庶民文化が栄えたのではあるが、その基本のところでは公家や武家の生活様式への憧れと模倣があったと思われる。また第2点として、士農工商の階級制の社会で、安定した生活を送るためには人間関係のバランス、調和が大切にされていたと思われる。その一つとして当時の贈答風俗がすべての階級で広く普及し、重視されたといえよう。第3点として、一般に日本人は無口で口下手なところがあり、そのためこの贈答ということが人と上手に話せなくても、自分の気持ちを伝えることができる手段としても行われたといえよう。大略して、贈答というのは、贈る人の気持ちを相手に伝えることのできる「コミュニケーション



図3-4 掛袱紗と捻袱紗(『女用訓蒙図彙』)

(伝達手段)」としての役割をもっており、そのことが江戸時代後期には、特に重視されたものと思われる。

そこで、この贈答と掛袱紗の装飾化のつながりをみる観点として、当時の贈答風俗にみられる代表的な行事を取りあげ、それとの関わりから装飾の要素である文様について江戸後期掛袱紗遺品図を資料に用いて整理分類を行った。その結果、資料とした掛袱紗の多くに、ほゞそこに代表される行事に対応する文様が見られ、これらの掛袱紗は、おそらくその行事に見られる贈答の際に使われたと思われる。つまり、贈答風俗との関わりが文様の中に表現されていると解釈された。次に、当時の掛袱紗の文様における傾向を吉祥文様として整理分類した。その傾向として、まず器物文様が多くみられた。これは器物文様には特定の行事を表したり、その行事や贈答にみられる器物が描かれることが多い所以と思われる。また、文学・芸能関係をテーマにした文様も多くみられたが、物語性や意味の広がりを感じられ、吉祥の心が強く伝えられるものであった。さらに全体として、絵画風の文様が多くみられた。これは、掛袱紗が折り曲げずにそのまま、広げて用いられるためであったと考えられる。

次に、掛袱紗のあり方・性格をその用いられ方に探った。資料とした掛袱紗は、江戸後期の町人や商人の上層の人々に用いられたものであり、まずこれら(A)と江戸中期の掛袱紗遺品とを主モチーフで比較を試みたところ、文様表現に武家好みと、庶民風の傾向(A)がみられ、用途も年始年末の行事に集中した用い方と、多用な行事を反映した用い方(A)と資料上の違いが確認された。概して、当時の生活の中では掛袱紗を「花車」すなわち、やゝ贅沢なものとして捉えられていたことがわかった。しかし、ファッションブックにモチーフ・色彩・加工法が取りあげられる程度には庶民一般に普及し、贈答用としてまた婚礼調度として使われていたことが窺えた。そうした中で、資料とした後期掛袱紗遺品は上層町人の生活の中で、多くの行事と結びつき、贈答風俗となっていたと思われる。

以上から、掛袱紗の装飾と贈答風俗とのつながりが確認された。つまり、日本人の贈答の特徴である形式化、儀礼化の傾向、そしてコミュニケーション(伝達手段)のひとつとしての役割が掛袱紗の装飾の中に表現されていたと思われ、掛袱紗を使うことによって一層それらの贈答の特徴を強調していたものと解釈された。

今日、江戸時代のもののような繡技で文様を施す掛袱紗を求めることは無理であろうが、江戸期の掛袱紗にみられた、着るものと同じ文様を施して用いたり、贈る事柄に応じた文様を施すなどのありようは、贈る心への再認識というか、人間の心を中心においた服飾品の用い方、あり方として、大きな示唆を与えてくれると思う。

引用文献・参考文献

- 注1) 齊藤馨 『ふくさく繡紗抄』 1975 京都書院
 注2) 『玉勝間』 (『日本の古典』久松潜一ほか編) 河出書房新社 1972
 注3) 『日葡辞書』 土井忠生ほか編訳 岩波書店 1980
 注4) 『貞丈雑記』 伊勢貞丈 吉川弘文館 1928
 注5) 額田巖 『ものと人間の文化史20・包み』 1977 法政大学出版社
 注6) 『岩波国語辞典・第五版』 1994 岩波書房 188頁
 注7) 猪熊兼繁 『日本生活史』 1952 世界思想社 134頁
 注8) 鈴木棠三編 『絵本江戸風往来 (東洋文庫50)』 1965 平凡社 65頁
 注9) 江馬務 「一生の典礼 (『江馬務著作集・第7巻』所収)」 1976 中央公論社 142頁
 注10) 『重要文化財31・補遺II』 1977 毎日新聞社
 注11) 平山敏治郎 『歳時習俗考』 1984 法政大学出版社 119頁
 注12) 梁塵秘抄 『古歌謡集・全』 1931 国民図書
 注13) 和歌森太郎 『年中行事 (日本歴史新書)』 1957 至文堂
 注14) 『年中行事・儀礼事典 (東京美術書19)』 1978 東京美術 419頁
 注15) 大和耕作絵抄 (書画筆上、石河流宣図) 序 (日本風俗図絵)
 注16) 上野佐江子 「江戸時代小袖文様に投影した中国の故事伝来」 天理大学学報 23巻 5号 277頁
 注17) 吉田光邦 『きもの・染め織り文様』 1981 主婦の友社 160頁
 注18) 江馬務 「一生の典礼 (『江馬務著作集・第7巻』所収)」 1976 中央公論社 332頁
 注19) 裴松 『三国志・卷四十八呉書・孫皓傳』 中華書局標点本 1169
 注20) 切畑健監修 『興福院所蔵刺繡掛袱紗』 紫紅社 1992
 注21) 上野佐江子編 『小袖文様雛形本集成・江戸期』 1974 学習研究社
 注22) 『友禅ひいなかた』 1688 (上野佐江子編『小袖文様雛形本集成・江戸期』所収)
 注23) 『雛形愛染川』 1747 (上野佐江子編『小袖文様雛形本集成・江戸期』所収)
 注24) 『雛形木の葉硯』 1763 (上野佐江子「江戸時代小袖文様に投影した中国の故事伝来」天理大学学報 23巻 5号)
 注25) 角山幸洋 「掛袱紗考」 (『美学』 13 (3) 所収) 81
 注26) 井原西鶴 『好色一代男』 天和2 (日本古典文学大系4 『西鶴集・上』所収 1980 岩波書店 180頁)
 注27) 『女用訓蒙図彙』 元禄期 (『家政学文献集成・続編江戸期VIII』所収 1970 渡辺書店 40頁)
 注28) 新村出編 『広辞苑・第4版』 1991 岩波書店 648頁
 注29) 河村まち子 「江戸時代後期の女性衣服について (嫁入り支度を中心として)」 日本風俗史学会会誌 『風俗』 28巻 3号 34-39頁
 注30) 江馬務 「一生の典礼 (『江馬務著作集・第7巻』所収)」 1976 中央公論社 330頁
 注31) 今井むつ子 「日本の刺繡(その2)刺繡文化と美 -掛袱紗にみる-」 1980 (衣生活研究会『衣生活』No.4 10頁)
 注32) 日本風俗史学会編 『日本風俗史事典』 1979